

## 青年トルコ人の国外活動資金問題

### 設 樂 國 廣

#### は じ め に

オスマン帝国では19世紀末から20世紀初めにかけて、スルタン、アブドゥルハミド二世の専制政治を終わらせて、1876年に制定された憲法の復活による立憲体制の復活を求める青年トルコ人運動の中心的存在は、1889年に創立された統一と進歩委員会 Osmanlı İttihat ve Terakki Cemiyeti であった。統一と進歩委員会創設当初、運動はオスマン帝国内、特にイスタンブルでの活動が中心であった。その後、統一と進歩委員会の構成員が地方での任務や追放により、アナトリアなどに拡大した<sup>1)</sup>。しかし、アブドゥルハミド二世の専制政治の拠点ユルドゥズ宮殿をはじめオスマン政府の弾圧が厳しくなり、1897年の大弾圧により、イスタンブルの統一と進歩委員会組織は壊滅的打撃を受けた。このため、運動は出版や通信などの事情により国外での活動が中心となった。

本論では、オスマン帝国外で活動せざるをえなかった青年トルコ人の運動の困難と限界を把握し、その基本的問題である生活および活動の資金について考察する。

#### I 反政府活動と弾圧

青年トルコ人運動は、統一と進歩委員会が1889年に結成されて以来、組織的に急速な発展をみた。軍医学校の学生イブラヒム＝テモİbrahim Temo、イスハク＝スキュティİshak Sükûti、メフメト＝レシト Mehmet Reşit、アブドゥラフ＝ジェヴデト Abdullah Cevdet の4名<sup>2)</sup>によって創設された組織は、イスタンブルの高等教育機関に構成員を増やしていった<sup>3)</sup>。また、官僚層の中にも加入者を得た [Kuran 1945: 33]。

統一と進歩委員会は秘密結社であったが、顕著な活動が表に出ると、オスマン政府は弾圧を開始した。また、統一と進歩委員会の名称は憲法復活運動の象徴のように民衆の中に密か

- 1) ズィヤ＝ギョクアルプはアブドゥラフ＝ジェヴデトがディヤルバクルで勤務していた時に紹介されて統一と進歩委員会に加入した
- 2) 創始者のなかにヒュセインザーデ＝アリ Hüseyinzade Ali を加えるものがあるが、創始者には加えることはできない [Bayat 1998: 12]。
- 3) 4年後には加入者は900人となった [Mehmet Reşit 1994: 50]。

に浸透していった。

1894年、軍医学校の新任校長元帥ゼキ＝パシャ Müşir Zeki Paşa は、統一と進歩委員会創設者の一人メフメト＝レシトも<sup>4)</sup>含めて反政府活動家学生9人を逮捕した。イブラヒム＝テモは1892年に卒業したが、在学中を含め4回逮捕されたことから国外への脱出を決め、ウラフ人<sup>5)</sup>の友人の支援で、1895年1月1日にルーマニアに入国した [Temo 1939: 60]。

アブドゥラフ＝ジェヴデトとロードス島出身のスレイマン Rodoslu Süleyman, ファティフリ＝イブラヒム＝ナズム Fatihli İbrahim Nâzım は、1311年 kanunisani 16日 (1885年3月28日) に判決を受けて各々、トゥラブルス＝ガルブ (リビアのトリポリ)、ダマスクス、マナストゥル (マケドニアのビトラ) に送られた [Kuran 1945: 32]。さらに、イスハク＝スキュティも逮捕されて、ロードス島に流刑された。

1897年に統一と進歩委員会加入者の大量逮捕、有罪判決が出され、その結果78人の軍医将校らが、1897年11月8日イスタンブールのカバタシュから汽船シェレフェ号で、リビアへの流刑された [Kuran 1945: 36]。軍医大尉メフメト＝レシトはじめ、参謀少大尉シリストゥレリ＝ハミド Silistli Hamid, 軍医大尉ジェヴデト＝オスマン Cevdet Osman, 軍医大尉スレイマン＝エミン Süleyman Emin (後にパシャ), 参謀中尉ユスフ＝アクチュラ Yusuf Akçira などであった [Kuran 1945: 37-38]。

弾圧の結果、イスタンブールでは、1908年憲法復活後統一と進歩委員会のメンバーがサラニカからイスタンブールへ入るまで、イスタンブールでの統一と進歩委員会の独自の活動はほとんど見られなかったことから、組織的に壊滅的打撃を受けた。しかし、イブラヒム＝テモによれば若干の活動家との連絡があった<sup>6)</sup>。

## II 国外への脱出

オスマン帝国では反政府活動家への処分として、大部分は国内の辺境地への流刑であって、国外には追放されなかった<sup>7)</sup>。国外活動家は自らの意思で国外へ出た者であった。オスマン帝国は外国への渡航は禁止されていなかったが容易ではなかった<sup>8)</sup>。

1889年にアフメト＝ルザ Ahmet Rıza が、パリの万国博覧会の見学を理由に出国し、こ

4) 9人の中には Abdullah Cevdet, Şerafeddin Mağmumi もいた [Mehmet Reşit 1994: 51]。

5) キリスト教と遊牧民でバルカン半島で、物資の運搬に従事していた。一部はドナウ川の北、現在のルーマニアに定住した。

6) イブラヒム＝テモは手紙で名前を2桁の数字で文字を表わす暗号書いて送っている [Temo 1939: 95]。

7) ミトハト＝パシャがアブドゥルハミド二世によって憲法の条項に基づいて海外に追放された例がある。

8) オスマン帝国はヨーロッパの領土を保有していたことから、東アジアの日本や中国のように一般住民の海外渡航を禁止する海禁政策や国外往來の禁止の政策は行われていなかった。

の地で反政府活動を開始した [Rıza 1988: 10]。

統一と進歩委員会の成立時にパリ在住のアフメト＝ルザは、すぐに加入し、パリ支部を設立した。アフメト＝ルザは統一と進歩委員会の最初の国外活動家といえる。アフメト＝ルザとの連絡や活動の強化のため、統一と進歩委員会イスタンブル本部は軍医学校の学生をパリに派遣した。アラブ＝アフメド＝ヴェルダニ Arab Ahmet Verdani 選抜された。ナーズム Nazım もパリへ行くこと求めたので、二人がイスタンブルからパリへ派遣された [Kuran 1945: 31]。しかし、メフメト＝レシトは、最初にアフメド＝ヴェルダニ、次いでナーズムとアリ＝ズーフディ Ali Zühdi をヨーロッパに送ったと記している [Mehmet 1994: 51]。ナーズムは、アフメト＝ルザと意気投合し、1907年に密かにギリシア経由でサロニカに潜入し、進歩と統一委員会のサロニカ本部結成工作を行った。

青年トルコ人運動家の拠点として主としてパリ、ジュネーブ、ルーマニアのコンスタンツァ、エジプトのカイロなどの大都市が挙げられる。当時のドイツはオスマン帝国の友好関係にあったので、ベルリンでの活動はきわめて困難であった。ジュネーブはオスマン語の出版に都合の良い土地であり、パリに事務所を置いていたメシュヴェレト紙やミザン紙はここで印刷されていた。

イスハク＝スキュティは、流刑に処されたロードス島からベイルート経由で国外へ脱出し、統一と進歩委員会創設者として最初にフランスに来たとして注目された [Hanioglu 1985: 211]。アフメト＝ルザはイブラヒム＝テモへの手紙で、イスハク＝スキュティのパリ到着を望んでいた [Kuran 1948: 69-70]。アフメト＝ルザの腹心であるナーズムが、イスハク＝スキュティのロードス島脱出を支援した [Kuran 1948: 71]。

1895年の12月、債務管理局にいたカフカスのダゲスタン出身のミザンジュ＝ムラド Mizancı Murad は、イスタンブルを脱出して、クリミアに上陸したがロシア滞在を拒否されてウィーン経由でフランスに渡り、さらにエジプトにおいてミザン紙を発行し独自の活動を始めた [Kuran 1948: 70]。のち彼はエジプトからパリに移り、アフメト＝ルザとともに統一と進歩委員会パリ本部を結成した。アフメト＝ルザのメシュヴェレト紙がフランス語で、ムラトのミザン紙がトルコ語で各々統一と進歩委員会の機関紙となった。本部はパリに置かれていたが機関紙の印刷と発送はジュネーブで行っていた。ミザンジュ＝ムラトとアフメト＝ルザの友好関係は長く続かず、その後ムラトはジュネーブに移り、アフメト＝ルザとの意見の対立は顕著になり、その結果、統一と進歩委員会の運営委員会から離れ、ミザン紙の記事を書くのみとなった [MIZ: no. 25, 1897. 6. 28]。

アフメト＝ルザはパリにおける地位を確保するために、腹心のナーズム以外とは最終的に対立した。アブドゥラフ＝ジェヴデトやイスハク＝スキュティともはじめは共同歩調をとったが意見の対立で別れた。イブラヒム＝テモがパリでブルガリア人の新聞に抗議するように要請したにもかかわらず、スルタンへの抗議が先だとしてこれを無視する [Temo 1939: 170-171] など、有力者がパリで活動することを極めて強く阻止した。

1311 (1895) 年初めに上記以外でヨーロッパや、エジプト逃れた軍医学校の卒業生には、トゥナル＝ヒルミ Tunalu Hilmi, イズミルリ＝レフィキ＝ネヴザトゥ İzmirlı Refik Nevzat などが挙げられる [Kuran 1945: 32]。その他、第一次世界大戦後の戦勝国に従属するイスタンブル政府に荷担したとして、リンチを受けたアリ＝ケマル Ali Kemal や、アルバニア独立運動に参加したイスマイル＝ケマル İsmail Kemal などあった。

この時期における、パリ在住のオスマン帝国民はパリ大使館の記録によれば、1,389 人であり、40 人が国費留学生、31 人が私費留学生、8 人がムスリムの亡命者集団、8 人のうち、3 人は管理下に入っていない。300 人のアルメニア人の亡命者集団、900 人の商工業に従事するアルメニア人、29 人のギリシア人またはブルガリア人、36 人のシリア人（シリア教会徒）がいた。同様に、ジュネーブでは30人の留学生がいるがほとんどがアルメニア人またはブルガリア人の私費留学生である。14人のムスリム亡命集団がいる。そのうち10人は管理下に入っているが、3人はまだ応じていない。そのほか商工業に従事しているアルメニア人、ギリシア人、ブルガリア人、ユダヤ教徒が約200人居住している [Haniogul 1985: 478]

このように、ヨーロッパの中心地において、ムスリムのオスマン帝国民はきわめて少なく、生活の基盤をもって活動しているムスリムのオスマン帝国民はほとんどいない状態であり、亡命生活を送ることはいかに困難であるか容易に理解できる。ムスリムは、オスマン帝国からの公私の送金よってのみ生活が可能であった。

キリスト教徒とユダヤ教徒は、オスマン帝国のキャピトレーションによる対外貿易の窓口が彼等の通訳によって行われていたことから、ヨーロッパに進出していた。このため、オスマン帝国内で、独立運動を行い弾圧されて亡命したアルメニア人などのキリスト教徒は、パリ在住の同胞からの支援を受けることは可能であった。

1899年、アブドゥルハミド二世の妹セニハ＝スルタン Seniha Sultan の夫であり、かつ彼のいとこでもあったダマト＝ジェラレディン＝マフムト＝パシャ Damat Mahmut Celaleddin Paşa は、2人の息子サバハッティン＝ベイ Sabhatten Bey とルトゥフラッフ＝ベイ Lutfullah Bey を伴ってイスタンブルを脱出した。パリに一時滞在したマフムド＝パシャは、その後、エジプトに渡りヘディヴ（エジプト副王）から親子3人生活資金として毎月1,000リラの支援を受けていた [Kuran 1945: 129] が、アブドゥルハミド二世の抗議により、再びヨーロッパに戻り、各国を回っていた。後に、彼等の主催した1902年のオスマン愛国者会議は、国外の青年トルコ人運動の転換期となる大きな変化をもたらした。

### Ⅲ 国外での活動

国外の青年トルコ人運動で最も注目される1902年のオスマン愛国者会議<sup>9)</sup>は、1902年2月2日からの8日間開かれ、通称第1回青年トルコ人会議とされる。海外でオスマン帝国の改革を目指し、アブドゥルハミド二世の専制政治を排するための活動を推進しているほとんどすべての組織が参加した会議であった。この中には改革を目指すよりは新たな民族国家建設を目標としていたアルメニア人の参加も見られた。

会議は、マフムト＝パシャの呼び掛けで始まったが、実質的主権者はサバハッティン＝ベイであった。イブラヒム＝テモの組織したバルカン半島の統一と進歩委員会からは、ダブルジャ、ルメリ、ドナウの各支部から代表が送られた。パリ、ジュネーヴ、ロンドンの同志たちに連絡を取って、会議への参加を要請し、ダブルジャからは、オスマンファクフ＝シェイフ＝シェヴキ＝エフェンディが、ドナウからは、イブラヒム＝ナジそして、ブカレストからは、アルバニア人のデブレリ＝ヤシャル＝ベイがパリへ派遣された [Temo 1939: 158]。

会議参加者の意見対立から、その後の運動は多様に展開した。

統一と進歩委員会系は創始者メンバーであるイブラヒム＝テモやアブドゥラフ＝ジェヴデトなどのグループは、オスマン政府に反対するすべての勢力を結集することを目標とし、憲法精神である官僚政治家による政治体制を求めており、帝国の大きな変化は望んでいなかった。

一方、パリを中心に初期から活動を続けていたアフメト＝ルザらは、オスマン帝国の維持継続は、ムスリムの支配を正当化する中央政府の権力の強化し、非ムスリムの分離を拒否した。アルメニア人らの帝国を分割する民族独立の考えには強く反対した。

会議を主催したサバハッティン＝ベイはオスマン帝国を各宗教・宗派の自治権を尊重する連邦制を基盤とする体制を主張した。

さらに、アルメニア人は、民族国家建設を目指し、オスマン帝国の維持には反対であった。パリでは、アルメニア人の運動は組織化され、会議に参加したダシュナク派とファンチャク派が提案したアルメニア人の権利確保を、大会決議文にを加えることを要求した。しかし、改革によるオスマン帝国の維持を原則とするトルコ、アルバニア、アラブ、ギリシアの代表団はこの決議の追加は会議の主旨に反するとして拒否した。

憲法起草者であるミトハト＝パシャの息子であるアリ＝ハイダルは、スルタン権力の制限が帝国の維持に必要であると主張し、アブドゥルハミド二世個人ではなく、専制政治の打倒こそが大きな目標であるとした。

会議では、サバハッティン＝ベイ、イスマイル＝ケマル＝ベイ、ミトハト＝パシャザーデ

9) Osmanlı Hürriyetperverani Kongresi と名付けられている。

＝アリ＝ハイダル＝ベイ，モゾロス＝キクス＝ベイ，イスマイル＝ハック＝ベイ，ファルディ＝エフェンディ，セイレット＝ベイが常任委員が選出された [Temo 1939: 159]。

このように、国外での活動は、必ずしも統一的な運動は行われていなかった。この点から、諸派勢力が一堂に会する機会を持った1902年の愛国者会議は画期的な会議であったといえる。

#### IV 国外における青年トルコ人の生活

##### 1 アリ＝ズフディの手紙

アルバニアのチラナにある公文書館に所蔵されているイブラヒム＝テモの史料の中に、アフメト＝ルザとの連絡のため最初にパリに送られた軍医学校の学生アリ＝ズフディ<sup>10)</sup>が、メシュヴェレット紙発行のため滞在していたジュネーブからイブラヒム＝テモに送った手紙が存在する。

アリ＝ズフディのイブラヒム＝テモへの1312年 Teşrinievvel 2日（西暦1897年2月14日）付の手紙 [AQSH: RSH, F. 19 D. 32/1 No. 49]

「あなたの返書に非常に満足しています」で始まっており、アリ＝ズフディとイブラヒム＝テモの交信の一部である。アリ＝ズフディの手紙へイブラヒム＝テモが送った返事に対する、答えの手紙である。

「私は熟慮した。あなたが、現状では統一と進歩委員会の支部において重要な作業があつて多忙なために、私とともにあなたは活動できないであろうと言われたことを、私は理解した」とある。さらに、「自分自身で考えよう、様子を見よう、多分ルーマニア政府は2つの試験を行っている。3分の1の課程を修了した学生は多分受け入れられるであろうと、私はすでに述べた。あなたから支援を求めないのはこの理由からである。あなたの返事をもって、私は次のように決心した。あなたは、私が奨学金を受給するか、または病院に受け入れてもらうことを提案している。この2つの事項とも、私にとっては考慮外である。私のジュネーブ医科大学で学んだのは病理学であり、病院で働くことは考えていない。10日後から病理学と臨床を続けようとしている」とある。

しかし、「勉強の時間はなく何もしないで時間を過ごしているように思える。なぜならば、15日ごとに送られるメシュヴェレット紙を印刷所へ送り込み、その後、決められた宛先に送ることはそれほどの大きな仕事と言ひ難いのである」と自分自身についての反省もある。

この手紙の中で、アリ＝ズフディは困窮している状態を、生活費や活動資金の収入や出費を述べて説明している。

10) ジュネーブで精神の病を罹り病没した [Kuran. 1948: 104]。

「父親がなくなってしまったために、兄の退職金の中からの送金となり、たったの60フランになってしまった」。

「当然、60フランでは、ジュネーヴのような所では、生活していくには如何なる節約が必要があるかは理解できるでしょう」。

このほか、「友人のヌリと結成した『インティラク』から（送られて来るが）食べるにも事欠いている」。

また、「正直に言えば、イスタンブルの友人や仲間たちが、別々にまたはまとめて、私がこの地で無駄な時間を過ごさないで勉学に励むよう送金してくれた」。

## 2 ヨーロッパの青年トルコ人

イブラヒム＝テモは、1902年の秋、パリで専門の眼科の研修のためにルーマニアを離れた。イスハク＝スキュティがなくなってから8カ月後であった。はじめにジュネーヴにおいて、ブルガリア人やアルメニア人の組織について情報を得た。彼らの活動家の数は非常に多数であった [Temo 1939: 166]。また彼はパリで見た学生たちの様子を記している。

彼らの多くは、家からの送金がままたまなまま、貧困と空腹にさいなまれながらも暇があれば図書館や博物館、講演会などに通っていた。タフシンという学生は、パンテオンの近くの図書館で、本を持ったまま居眠りをしていた。彼を起こして、街角の労働者相手のスタンドで、白いパンにはさんだサンドウィッチを食べさせた。家からの送金を待って3日も文無し状態であった。家からの送金が無かったら友人から金を借りることは当然であると元気づけた [Temo 1939: 178-179]。

ある朝、イズミル出身の若者がリュクサンブール公園でコートもなしでうずくまって寝ていたのを見て尋ねると、月の家賃20フランが支払えないので家主に追い出され、部屋からものを持ち出せないと答えた。一緒に家主の所へ行行って、20フランを支払い、家主に、この若者の父親はイズミルで名の知られた人であるから送金は必ず来る、もし来なければ1、2カ月分は私が支払うと告げた。このようなトルコ青年が多数パリやジュネーヴにいた [Temo 1939: 180]。

病院での研修を終えてあるカフェに入り座ったところ、トルコ人青年が来て、あなたがパリへ来たのを聞いて会いたくてきました。もしよろしければ、ビールを差し上げて話をしたいのですといったので、話をした。イズミル出身者であり、親は官吏でまとまった送金は困難であり、広告屋に行行ってピラを街角に貼り歩く仕事を手にいれ、学費を得て授業に遅れないように努力しているといった。そのとき、瓶の中に緑のオリーブをいれて売り歩く青年がきた。イズミル出身の学生は彼からつまみとしてオリーブを25サンチウムで買った。青年のトルコ語からアルメニア人であることがわかった。何をしているのか質問したところ、薬学を勉強している、夜23時までオリーブを売り歩いて昼間は講義を受けていると答えた。同胞たちから援助は受けないのか、との質問に、私は傷害者ではない。同胞たちは、病人や

傷害者を支援している。私は自分で生活できるのだから自分で生きて行くと答えた [Temo 1939: 180-181]。

彼らが帰った後、トルコ人の若者がたむろしているカフェの角を通ったとき、知り合いの若いパシャの息子からなぜあのイズミル出身者やアルメニア人と話をしていたのか、彼らをわれわれは無視しているのだ。彼らは、広告を貼ったり、ビヤホールでオリーブを売ったりしている [Temo 1939: 181-182]。

イブラヒム＝テモは、トルコ人の海外にいる青年を、苦学をしながらも祖国の改革を求めている者と、裕福な親元からの送金などで豊かな留学生活を送り、オスマン帝国の現状に関心のない者たちに分けている。

カルチュ＝ラタンでトルコ語を話す二人を見かけ、その内の一人は、イスタンブルの軍医学校からパリに派遣したアラブ＝アフメド＝ヴェルダニ Arab Ahmed Verdani であった [Temo 1939: 168]。アラブ＝アフメド＝ヴェルダニは、先生、久しぶりですねといった。イブラヒム＝テモは、いま空腹なので食堂を案内してほしい、そこで食べたい。というと、アフメトは、顔色が変わった。哀れなことに金が無いのだということがわかった。私には金はある、ただ、案内してくれればいい、経済的な食堂と、安いホテルを紹介してほしいと伝えた。3皿とフランスワインでパンがついて、1フラン45サンチュムで食事ができた。彼は月60フランの適当に広い二階の部屋を探してきた [Temo 1939: 169]。

ブルガリア人やマケドニヤ人は自分たちで、共同炊事で食事を作っていた。これで一日3食、2フランを越えることはなかった。しかし、家族からの送金が途絶えている状態では、休日や日曜日は、どこにもいけず、無料コンサートに行つて暇をつぶしていた [Temo 1939: 170]。

イブラヒム＝テモはパリに入る前にジュネーブで同志のトゥナル＝ヒルミ、イブラヒム＝ナジや元大宰相ハリル＝リファト＝パシャ Halil Rifat Paşa の息子のアフメト＝ベイ Ahmet Bey と接触した。イブラヒム＝テモはアフメト＝ベイとの間で連絡はとりあっていた。当時アフメト＝ベイは、駐在武官の公職についていたが、統一と進歩委員会のために行動し、必要な支援を行っていた。ジュネーブからパリへ、ロンドン大使館へ出かけるアフメト＝ベイと同行した。彼は、1等車で、イブラヒム＝テモは2等車であった。彼は、イブラヒム＝テモにパリでの経済的なホテルとして一泊6フランの「ド＝グロブ」を紹介し、安い床屋として19フラン支払い、「どうです安いでしょう、先生、」といったと記している [Temo 1939: 143-145]。イブラヒム＝テモは、6カ月の滞在に月々300フラン用意できていると語っている。帰国の費用を計算すると、月々の金は240-250フランとなっていた [Temo 1939: 167-168]。

また、ミトハト＝スキュリュ＝ブレダ Mithat Sükurü Bleda は、1895年ジュネーブに数学の勉強をするために来たが、別の目的は、自分より前にヨーロッパに逃れ活躍する自由の英雄と共に活動することであった。ナーズムとともに、ジュネーブで進歩と統一委員会の支



部を結成した。彼も国外での活動を希望していた [Bleda 1979: 14-16]。彼は、立憲体制復活後、統一と進歩委員会の本部が置かれたサロニカにあって、総書記として活動した。ブカレストでイブラヒム＝テモと会見している<sup>11)</sup>。

## V 活動資金の源泉

国外で活動する人達の生活に必要な資金は、多くの場合は親族からの送金であり、それ以外に寄付金などがあった。収入を得る仕事につくことは極めて難しかった。イスハク＝シュキュティは、カイロでカヌヌーエサン紙を発行する資金が無くなっており、この新聞が出せないことはエジプトでの活動に大きな影響を与えると 1899 年 6 月 5 日の手紙で [Kuran 1948: 115-117] いていたがその後、別の手紙で、同紙を休刊することで、1,000 イギリスポンドを受け取り、仲間で分配したとトゥナル＝ヒルミに伝えている [Kuran 1948: 119]。

イブラヒム＝テモはオスマン帝国において取得した医師の資格をもって、ルーマニアのムスリムの医療に貢献することにした。眼科の研修とルーマニア語の取得のため、ブカレスト病院のマノレスク Manoresuku 教授の下で 1 年間講義を受け、内務省に免許の申請を行った。内務省の衛生局長は、これまでトルコ人に医師の免許を出したことが無いので、受け付けなかった。友人が、ユダヤ教徒には免許を出しているのに、ムスリムに出さないのは、ダブルジャのムスリムが反乱を越すかもしれないなどと説得し、医師試験の受験資格を得た。2 ヶ月後試験に合格し、医師の免許を得た [Temo 1939: 64]。ルーマニアのダブルジャ地方にはムスリムが多数居住していた。また、アルバニア人は 2 派に別れていたが、裕福でないムスリム、アルバニア人グループは、青年トルコ人運動に好意的であった [Temo 1939: 61]。イブラヒム＝テモはこのようにして生活の基盤を確保して、政治活動を行なった [Temo 1939: 64]。

アフメト＝ルザは回顧録で、資金確保の活動を述べている。パリでメシュヴェレト紙の発行を始めた年が最も経済的に苦しかった。冬に暖をとるために夕方は図書館で過ごした。部屋には暖房がないので、新聞や本はベッドの中で読んだ [Rıza 1988: 17] と書いている。しかし、彼は、以前にパリの農学校で学んだことがあるので知人もあり、生活資金を得るために彼がパリで始めた仕事は他のものに比べて良い条件であった。「ブルサ教育長をはなれてパリにきたときは、懐には百リラがあった。この金がつきない内に仕事を探さなければならなかった。知人のムシュ＝キルコフの紹介で、司法省で公文書の翻訳の仕事を見つけたが、

11) 1898 年にブカレストでイブラヒム＝テモと会見し統一と進歩委員会ブカレスト支部を結成している [Temo 1939: 125]。

給料制ではなく、必要なときに仕事がもらえた。しばらくして、ヤファーイェルサレム鉄道会社で、百リラの給料で翻訳の仕事を見つけた。さらに、ベイルートーシリア鉄道会社でも同じ様な仕事を受けて百リラの給料を受けるようになり、合計二百リラを月に手に入れることができた。さらに司法省からは50～60リラを受け取っていた」[Rıza 1988: 18]。しかし、反政府活動はオスマン帝国内に利権をもつ会社にとって不都合であった。メシュヴェレット紙を発行すると、会社は、アフメト＝ルザを仕事から外した [Rıza 1988: 18]。資金源が制限されたアフメト＝ルザは、パリでは誰にも頼らなかった。後に「3、4人の友人以外からは金を受け取っていない。私がパリで一年間の生活に使った金は、ベイヨールで一人のスパイが一晩で使う金よりも少ない」と記している [Rıza 1988: 19]。

具体的に資金援助者とその金額については、ストックホルム大使、シェリフ＝パシャ Şerif Paşa, 月100フラン、エジプトのイZZET＝パシャ İzzet Paşa, 毎年パリに来たとき千から千五百フラン、エジプトの王女ナズル＝ハヌム Nazır Hanım 一年だけ五百フラン、エジプトのムハマド＝アリのハーレムのエニセ＝ハヌム Enise Hanım, 二千フラン、エミネ＝ハヌム Emine Hanım, 一回のみ二千フラン、ローマ大使館のレシト＝サディ＝ベイ Reşid Sadi Bey 月50フラン（一時期）、クレタのイブラヒム＝エテム＝ベイ İbrahim Etem Bey 約五百フラン、エジプトのムスタファ＝ファズル＝パシャ＝ザデ＝メフメト＝アリ＝パシャ Mustafa Fazıl Paşazade Mehmet Ali Paşa 月200フラン（行動を共にした時期）。これら以外に新聞の購読料としての収入が、不定期であったが、五フランから二十フランの間であった [Rıza 1988: 19]。

アフメト＝ルザの支援者としてエジプトのムハマド＝アリ朝の人達が注目される。後に第1次世界大戦へオスマン帝国が参戦したときの統一と進歩委員会内閣の大宰相となるムハマド＝アリの孫であるサイド＝ハリム＝パシャ Prens Said Halim Paşa とパリで行動をとるにもしており、このときに、サイド＝ハリム＝パシャは統一と進歩委員会に加入している。

サイド＝ハリム＝パシャとの関係はそのほか、サロニカに成立したオスマン自由委員会の活動を支援し、進歩と統一委員会サロニカ本部への改編を目的として同志のナーズムをサロニカへ派遣する資金を集めるためにサイド＝ハリム＝パシャの支援を受けている。「エジプトに渡って、サイド＝ハリム＝パシャの案内で、五万フラン集めた。この金を受け取ったあとで、ナーズム＝エフェンディを国内に送り込んだ。エンヴェル Enver とニヤーズィ Niyazi を山に登らせて蜂起させた」 [Rıza 1988: 19-21] とあるが、エンヴェルとニヤーズィを蜂起させる計画にこの資金がどのように使われたかは明確ではない。エンヴェルの戦線離脱とニヤーズィの蜂起はほぼ同時に起こされたがお互いの関係は明確ではない。ニヤーズィの蜂起は、マナスツル本部の指導で行われた。ナーズムはサロニカ本部との接触であったことから、この資金の行方は明らかにならない。

また、懐柔工作の一方経済的圧力について「アブドゥルハミド2世は、私を説得させるために義理の兄弟に母親の手紙をもたせてをパリに送り込んだ。しかし、母親は、イギリスの

郵便による手紙を別に送ってきた。それには、『おまえが祖国への義務を放棄してイスタンブルに戻ってきたならば、家の門の錠はしまっていると思いなさい』。母親はそういう人であった<sup>12)</sup>。彼の母親は、イスラム教を受容した「完全なトルコ人」と言われたオーストリア生まれの人であった [Akşin 1998: 39]。「諜報長のアフメト＝パシャが送り込まれ、ナーズム＝エフェンディ以外はすべて月給に引かれて私から離れて行った」。「15日で1回発行するメシュベレット紙には月々郵便料金も含めて300、または350フラン経費が必要であった」 [Rıza 1988: 21]。アブドゥルハミド2世は資金源を断ってメシュヴェレット紙の発行を阻止しようとした。資金源が断たれば、友人たちは私から離れるであろうと考え、諜報長のアフメト＝パシャをパリに送り込んだ [Rıza 1988: 21]。パリ駐在大使で、まだベイであったミュニル＝パシャ Münir Paşa が、しかるべき額の金を申し出たが、私は、受け入れなかった [Rıza 1988: 11]。「その後、ユダヤ教徒の貴金属商が私に対して、いくら必要であるか質問した。これに対して拒否の返答をした」 [Rıza 1988: 11-12]。しかし、アフメト＝ルザの支持者も存在した。「ロンドン大使のコスタキ＝パシャ Kostaki Paşa が任地に赴く時、パリで私と会って、公式的発言をした後、『(外交官であったあなたの) 父親と友人であった。あなたが言っていることは正しい、不満を持っている国民の声を代弁することが必要である』と述べた。同行したエビュズィヤ＝テヴフィク＝ベイ Ebüziya Tevfik Bey も公式発言の後、この愛国的活動を続けることを支援しますと述べた」 [Rıza 1988: 12]。

イブラヒム＝テモによれば、スルタン政府の懐柔工作は多くの活動家に対しては成功している。彼等に対して、10日以内に、反政府活動を停止することを宣言しないならば、オスマン帝国の市民権を剥奪し、以後帰国を認めないと通告し、これに従うならば、帰国を希望するものは帰国を認め、海外に残留を望むものは、在外公館に配属し、学業を継続するものには奨学金を支給するというものであった。これに多くの従ったが、反発するものもあった。1897年 jabvye 27の日付で、カイロからイスマイル＝イブラヒム İsmail İbrahim が、イブラヒム＝テモにカイロの統一と進歩委員会に対する疑問を申し送っている。

やっと病気が治ったのでこの手紙を書きます。何回か手紙を送りましたが、返事をいただいております。着いたのか、着かなかったのか、私にはわかりません。あなたの住所を良く知りません。あなたからの連絡はまったく受け取ってておりません [Temo 1939: 96]。ムラトとレシドは、エジプト副王に対してミザン紙を閉鎖することに同意した。副王は喜んで、一人は1リラ、一人は半リラのホテルを提供し、エジプトに滞在を許可した。彼等は、副王の手や足に接吻し、ムラトは毎月20リラ、レシドは10リラを受け取っていた [Temo 1939: 96-97]。

12) オスマン帝国内には主要都市にヨーロッパ各国の領事館が置かれ同時に郵便局などが治外法権をもって設けられていた。郵便局は、通信の機密保護を理由に、オスマン官憲の干渉を受けることなく比較的容易に外国との通信が可能であった。

一人のクロアチア人スパイが、われわれの同志イスハク＝エフェンディとレシャト＝ベイ Reşat Bey をヨーロッパからこの地に呼び寄せた。(中略) エジプトで、仲間を一人一人訪問を始めた。スルタン、アブドゥルハミド二世からこれほどの金額が得られ、あれこれができると言って、多くの人を取り込み始めた [Temo 1939: 102]。この地の多くの仲間で金を受け取ることに同意した。金額は博士は 600 フラン、学生は 300 フランでもって学業を継続する、その代りに書いたもの描いたものはまったく発表しない。結局私はある日、イスハクに問いただした。統一と進歩委員会の閉鎖を決めて何を得たのかと。1,800 リラと答えた。この 1,800 リラで何か月働けるのか、しかし、統一と進歩委員会の活動はどのように正当性が保たれるのかと私は言った [Temo 1939: 102]。

ミザンジュ＝ムラットは、アフメト＝ジェラレディン＝パシャの工作によりジュネーブでの活動を停止し 1897 (1313) 年 8 月 2 日イスタンブルに帰国した [Kuran 1945: 58]。同時に彼の工作により、次のような妥協をした。アブドゥラフ＝ジェヴデトはウィーン大使館付医官、イスハク＝スキュティはローマ大使館、チェルケスル＝アフメト Çerkes Ahmet はベオグラード大使館付武官、セルアスケリの副官シェフィキ＝ベイ Şefik Bey はブカレスト、アリ＝ケマル Ali Kemal はブラッセル大使館、トゥナル＝ヒルミ Tunalu Hilmi はマドリード大使館、ラウフ＝アフメト Rauf Ahmet はアテネ大使館、セラフェッティン＝マウムーミ Selafettin Mağmumi と若干名は学業の継続、ラフミ、スレイマン＝ナジフらは帰国した [Kuran 1945: 58]。

オスマン紙は休刊となった。オスマン紙を発行していたグループは、学生として教育を受ける名目で、宮殿から金を受け取った [Haniogul 1985: 241]。アブドゥラフ＝ジェヴデトもトラブルス＝ガルフからヨーロッパに渡って 1 ヶ月後から金を受け取り初めている [Haniogul 1985: 35]。イスハク＝スキュティ、トゥナル＝ヒルミも、12 リラをユルドゥズ宮殿から受け取っていた。スルタン府書記官長タフシン＝パシャ署名の記録には<sup>13)</sup>「ヨーロッパにいる学生のスキュティ、ジェヴデト、ヒルミ＝エフェンディたちにクレディ＝リヨン銀行の口座から終身 12 リラ給与として与える。1314 Agustos 8 タフシン」 [Haniogul 1981: 66]。

イスハク＝スキュティ、アブドゥラフ＝ジェヴデト、トゥナル＝ヒルミに対して、12 リラ支給するこの文書は、彼等が懐柔工作を受け入れてからほぼ 1 年経過した西暦では 1898 年 10 月 17 日の時点である。

国外で活動するための資金確保の困難さは、政府側の懐柔工作の目標となり、多くの活動家が妥協の道を進むざるを得なかった。これにもかかわらず、ヨーロッパの運動は継続され、国内にさまざまな影響を与え、1908 年のマナストゥルの蜂起により、憲法が復活された。

13) Yıldız Sarayı Hümayunu, Başkıtabet Dairesi 4151.

## ま と め

国外のオスマン政府の専制政治に反対する運動は、アフメト＝ジュラレディン＝パシャの資金と職場の提供工作によって打撃を受けた。ジュネーブ、ロンドンで発行していたオスマン紙や、ムラト＝ベイの発行していたミザン紙も休刊となり、ミザン紙発行人のムラトはイスタンブルに帰国した。ムラトの行為は転向者として非難を受けることになった。

また、オスマン紙を発行していた統一と進歩委員会の創始者達、その他の多くの活動家が資金の欠乏による妥協をはかった。彼等は矛盾点を知り、再びヨーロッパで活動を再開した。

国外での統一と進歩委員会の反政府活動は、生活の基盤をもてないことによって極めて困難な状態であった。彼等の立場は、オスマン帝国から独立を目指し、国外に支援組織をもつアルメニア人活動家たちとは異なっていた。彼等は、オスマン国家の維持を希望しており、オスマン国家の存在は肯定していた。政府の改革を求めて国内で軍務などにつきながら反政府活動を行っていたことから、政府から金を受け取ることは、彼等にとって大きな矛盾とは考えていなかったのではないだろうか。

この中で、終始オスマン政府の懐柔工作を受け入れなかったアフメト＝ルザは公正さを保ったとして強力な存在となり、統一と進歩委員会を代表する有力者となった。この点は、シンン＝アクシンも指摘している [Akşin 1998: 49]。しかし、彼は、さまざまな手段で資金を集めており、このことは単にスルタン政府と直接妥協をしなかったのみである。

しかし、アフメト＝ルザが妥協しなかったことは、1908年の自由の宣言後有利に展開した。帰国後、すぐに統一と進歩委員会の中央委員に選拔され、復活国会のイスタンブル選出議員となり、さらに、民衆院議長ともなった。しかし統一と進歩委員会内の権力闘争で、タラートらのサロニカ派に破れ、元老院議長になった。

統一と進歩委員会の創始者であるイブラヒム＝テモは、パリやジュネーブの様なヨーロッパの中心ではなくルーマニアの地で活動していたために、直接の懐柔工作を受けることなく1908年の憲法復活を迎えた。懐柔工作に関わりが無かったのは、彼がルーマニアで医師としての生活基盤を確保したことも影響している。ルーマニアでの政治活動も行っていたが、1908年に帰国したものの、統一と進歩委員会は、パリ派とサロニカ派に指導体制を独占されており、イブラヒム＝テモが統一と進歩委員会のメンバーとして活動する余地は無くなっていた。

アフメト＝ルザのパリから国内におこなった広報活動が、進歩と統一委員会と名乗っていたことも多くの人達に理解されず、統一と進歩委員会の正統であったイブラヒム＝テモは憲法復活の中で、政治の舞台から排除された。彼は後に、ルーマニアの上院議員となった。

## 参 考 文 献

AQSH : ARKIV QENDOROR SHTETEROR.

MIZ : Mizan Gazetesi.

Akşin, S. (1998) *Jön Türkler ve İttihat ve Terakki* (2. Baskı). İstanbul.

Bayat, A. H. (1998) *Hüseynzâde Ali Bey*. İstanbul.

Bleda, M. Ş. (1979) *Osmanlı İmpartorluğunun Çöküşü*. İstanbul

Hanioğlu, H. Ş. (1981) *Bir siyasal Düşünür Olarak Abdullah Cevdet ve Dönemi*. İstanbul.

Hanioğlu, H. Ş. (1985) *Bir siyasal Örgüt Olarak 'Osmanlı İttihat ve Terakki Cemiyeti ve "Jön Türkler" (1889 – 1902), cilt. 1*. İstanbul.

Kuran, A. B. (1945) *İnkılâp Tarihimiz ve Jön Türkler*. İstanbul.

Kuran, A. B. (1948) *İnkılâp Tarihimiz ve İttihat ve Terakki*. İstanbul

Mehmet Reşit (1994) *İnkılâp Niçin ve Nasıl oldu* (ed. Nejdet Bilgi). İzmir.

Rıza, A. (1988) *Meclis-i Mebusan ve Ayân Reisi Ahmed Rıza Bey'in Anılar* (Cumhuriyet Gazetesi 26 Ocak–19 Şubat 1950). İstanbul.

Temo, İ. (1939) *İttihat ve Terakki Cemiyetinin Teşekkülü ve Hıdematı Vataniye ve İnkılâbı Milliye Dair Hatıratım*. Romanya–Mecidiye.

(立教大学文学部)